

入院5日目に抱いた病院不信

山ほどのおもちゃと、想いの写真が飾られた小さな机。そこには内服薬を誤って静脈に点滴されるといふ初歩的ミスで1歳6か月の幼い命を奪われた、菅俣笑美ちゃんの写真が置かれていた。その文字さんは口を開いた。

「これは仏壇ではなくて、笑美のベッド。笑美をお墓に入れて離れて暮らすのはどうしても寂しくて……。主人がこ

す。どうかあの子たちが安心して治療を受けることができるように、笑美はもうこの世にはいませんが、いつもそう願っているんです」

笑美ちゃんが、神奈川県伊勢原市にある東海大学医学部附属病院に入院したのは99年2月7日。生後131日目のことで病名は気管支炎だった。出産時からのかかりつけではあったが、同病院に対してふたりが不信感を抱いたのは、入院してわずか5日目だった。笑美ちゃんにおむつか

ぶれができていたのだ。「それどころか、背中にまでびっしりと広がったうんちが、敷いてあったタオルにまでもれていくこともあったんです。入院患者に対する日常的な観察が甘いことには、常々不満を感じていました」(文子さん)

東海大死の小児病棟

両親が涙の告発!



菅俣弘道・文子さん
つらい1年6か月も、思い出はぎっしり(事故直後会見を行なった弘道さん=上、昨年12月、病室でXmasを迎えた文子さんと笑美ちゃん)

「自分たちは、そんな事故に遭うはずがない」。医療事故の報道を聞き、ほとんどの人が抱くのは、そんな思いではないか。未熟児で生まれた娘を救ってくれた病院を信じ、たからこそ入院。しかしそこで、まだ言葉も喋れない幼い患者が受けたのは、死に至るまでの恐るべき医療事故の連続だった。小児医療の現実を、東海大病院事故の被害者が、克明なメモをもとに明かす。

1歳6か月の愛娘が医療事故で殺されるまで

薬剤について質問をされた。でも、「ギア、なんでしよう?」などと答えに詰まる場合もあった。

3月中旬になると、文子さんはそんな危機感から育児日記に体重の推移や処置内容、担当看護師などをできる限り克明に記録するようにする。細かい字でびっしりと綴られ、ときに欄外にまではみだしたその記録からは、今回の事故以前にもまだまだくさんのミスがあったことが、みてとれ

る。入院から3か月が経過した99年5月9日、文子さんが面会に訪れると笑美ちゃんの様子がいづれと違っていた。「なんだか機嫌が悪そうだなと思っていたら、点滴を留めているチューブが緩んでいたんです。看護師さんに見てもら

うと、腕に刺した点滴の針が折れ曲がって……。どうりで笑美が泣きじゃくっているはずですよね」(文子さん)と。ところが点滴トラブルはこの日だけではなかった。なんと翌日に弘道さんが面会に行

くと、針とチューブをつなぐジョイントが緩んだために、血液と薬剤が逆流して噴き出し、笑美ちゃんの顔が血だらけになっていた。「タオルや顔、洋服にまで血が飛び散った状態で大泣きをしている。あわてた主人が看護師さんを呼びに行くと、あー、泣いてましたア!?」なんて、とぼけた態度だったというんです……。看護師さんにとって乳児は泣くのが当たり前で、だからこそ事の重大さを見逃してしまっているのではないか、その思いが頭から離れませんでした」(文子さん)



「衝撃口誌」一巻公開

東海大病院は笑美ちゃんが入院していた1年2か月になんと8件もの医療ミスを犯していた

痛くても苦しくても、泣くことではかそのつらさを訴えられなかった笑美ちゃん。しかし、彼女が受ける事故の被害は、減るどころかさらに深刻さを増していった。

7月11日。今度は、看護婦のミスで鼻から十二指腸まで通っていた経管栄養チューブ(ED)が外されてしまった。

「私ひとりではチューブ固定のためのテープ交換をしても大丈夫だと思っただけです。だけどテープを外したときに首を左右に振った勢いで、チューブが外れてしまっただけ。そういえば笑美ちゃん、もう動く時期だったんですよ……」

と自戒をこめた謝罪があった。とはいえ病院側からの説明は一切なし。さらに再挿入する技術を持つ医師がいなかったために、その後3日間はEDからの経管栄養剤注入は中止せざるを得ない状態となった。



無念の死を噛みしめての闘いが続く(思い出の品に囲まれた仏壇と病院側の説明会見)



「面会を終えた主人から、ずっと痩せちゃっているけど、びっくりしないのでね」と電話

美ちゃんは下痢をして、一晩で15%も体重が激減。60kgの成人ならば、9kg減った計算だ。だがそれでも面会に訪れるまで、病院からは連絡すらなかった。

事故死を呼んだ別の医療事故

壁や冷蔵庫など、自宅には至るところに笑美ちゃんの写真が飾られ、キャラクターグッズや文字さんお手製のおもちゃであふれかえっている。

その中でもひととき目立つ、ミッキー・マウスの木馬がある。9月29日の1歳の誕生日にプレゼントしたその木馬は、耳を押すとメロディが流れる。笑美ちゃんの大的お気に入りだった

ため、いつもベッドサイドに置いてご両親が遊ばせていた。看護婦たちもそれを知っていて、

があったので、心の準備はしていたものの、実際に病室に行くとき笑美のベッドにはとても近付けませんでした……」(文字さん)

このときの日記には、こんな言葉が綴られている。ママ、あまりの細さに驚く。昨日とは大違いだったから

「笑美ちゃんを乗せて揺らしていたら寝ちゃいましたよ」なんて、報告を受けたこともあったんですよ

と、文字さんは目を細めながら懐かしそうに話す。

「最初は怖がっていた笑美も、今年に入ってから、支えなしでもひとり木馬に乗れるようになっていました。昨年末には寝返りも打てるようになったり、普通の子の2〜3倍はかかりましたが、ゆっくりでも成長していく笑美を見るのは、本当に楽しかったです……」

ところがこの間に、MRS A(メチシリン耐性黄色ブドウ球菌)感染症に院内感染して

いた事実が、4月になって明らかとなる。弘道さんが聞いたすと、実は昨年12月から3回にわたってMRS Aの検査を受けていたことがわかった。

自分たちのミスを隠し続ける病院に対する怒りは、こんな言葉で書き記されていた。A親に知らされていない。他の病室も検査されていたのでは

そして4月2日、昨年7月に続きふたたび、EDが抜けるミスが起こる。このときは同日に再挿入が行なわれているが、呆れたことに翌日もまたEDが抜けるという失態が起きている。

文字さんが面会に行くとき

針痕だらけの姿……涙の選択

事故当日、4月9日の午前8時45分、夜勤明けのP看護婦が本来はEDに注入するべき内服薬の入った注射器を、誤って点滴用の三方活栓に差し込んでしまう。直後、笑美ちゃんは手足をピクッとさせると、みるみる顔が青ざめて

いき、午後9時には容態が急変。心臓マッサージをしなければ、心拍が停止するほどの危険状態に陥った。

「笑美の点滴は午前9時に抜く予定になっていたと、後で面会した際にP看護婦から聞きました。実は普段から、投

科の教授はそこで、まさか死ぬとは思わなかった。トックラスの医師がこれだけ頑張っていたんだから、大丈夫だと思った」とも漏らしている。元気がなくなったら、放っておこうという魂胆が、ミエミエですよ

弘道さんが指摘した時間などの不審点について、両親は全文コピーによるカルテの開示を病院側に求めている。このような事故がどうして起きたのか、その原因がとにかく知りたいからだ。しかし、病院側はこれを拒否。病院側はまず両親への口頭での説明を主張しており、両者の交渉は平行線をたどっている。とはい

え、文書によるカルテ開示は、米国ではもはや常識である。最高裁のまともにと、昨年1年間に提訴された医療過誤の件数は638件にのぼり、過去最高を記録。また先月18日には東京大学医学部附属病院、6月2日には東京医科歯科大学の医療事故が発覚するなど、枚挙に暇がない。

このような状況の中、もしも家族が入院することになっ

Dが点滴に替わっており、理由を尋ねると看護婦は、EDが口元まで飛び出してたんですよ」と、悪びれもせずに答えたという。

「EDの先端が口元まで出てくるなんて、相当の腹圧がかかるんじゃないとあり得ません。過去にもあったようにほぼ吸引がヘタだったのか、すごい勢いでオエツ」となったのか。それを看護婦さんは、平然と語ったんですよ……」

EDが抜け、体力の低下から、再挿入を断念して点滴を余儀なくされたわけだが、もしもそれまでどおり、EDで内服薬の投与を行っていたら、6日後のあの事故は起きなかった……」

「医者任せにせずに、患者本人が病状や処置内容を逐一、把握する。治療してもらおう立場」と受け身にならず、積極的に治療に参加することが大切だ

昔僕さんたちも、克明な病床日誌をつけるなど、なんとか事故を回避すべく対策を立ててきた。度重なる事故があったとはいえ、病院を替えるという選択肢はなかった。

「1分でも長くそばに居られて設備の整った病院は、他になかったというのもありませぬ。今はもう取り返しのつかないミスを犯されてしまいましたが、東海大病院では生後2か月、未熟児だった笑美を助けてもらった恩があったので、笑美をずっと預けていたのかもしれないね……」

感じていた恩義を仇で返された弘道さん・文字さんの声を、病院はどう受けとめるのか。その答えをふたりは、日々、待ち続けている。

確認を取り、同意を得ている。だが事故から90分以上も連絡がなかったことに加えて、公表までに36時間もかかっていることに、弘道さんは怒りを募らせた。事故後の病院側の対応は、両親にとっ

はさらには、納得いかない美ちゃんの下痢をして、一晩で15%も体重が激減。60kgの成人ならば、9kg減った計算だ。だがそれでも面会に訪れるまで、病院からは連絡すらなかった。

「面会を終えた主人から、ずっと痩せちゃっているけど、びっくりしないのでね」と電話

「笑美ちゃんを乗せて揺らしていたら寝ちゃいましたよ」なんて、報告を受けたこともあったんですよ

「笑美の点滴は午前9時に抜く予定になっていたと、後で面会した際にP看護婦から聞きました。実は普段から、投